

だいじゅうきゅうしょう
第十九章

おに はいぼく
鬼の敗北

おに むすめ さら やま ほう む ある だ わかとの うまや い
鬼は、娘を攫うと、山の方へ向かって歩き出しました。若殿たちは厩に行き、
うま くら お の おに お
馬に鞍を置いて乗り、鬼を追いかけていきました。

まち め おに おに か きつねくさ
町を抜けると、鬼はくんと臭いを嗅ぎました。「なんでこんなに狐臭いんだ」

「そのお嬢さんは俺が守っている。貴様のような奴が彼女を傷つけてはならんぞ」という声を鬼は聞きました。びっくりした鬼は娘を掴んだ拳の方へ目をやりました。と、その瞬間、大きな穴に足が嵌まり、ひっくり返ってしまいました。

おに た あ まえ お わかとの と たち おに
鬼が立ち上がる前に、ちょうど追いついた若殿がすかさず跳びつき、太刀で鬼の
くび き お だいじょうぶ さげ
首を切り落としました。「ゆき！どこだ！大丈夫か！」と叫びました。

しんばい こえ わかとの こえ ほう かお む
「心配はございません」という声がしました。若殿は、声のする方へ顔を向けました。すると、そこには狐が立っていました。「城へお帰りください。本物の
お嬢さんは無事で城にいます」と狐は言いました。

きつね おどろ わたし め どの おに さら うつ
「狐どの！驚きました。でも、私の目には、ゆき殿が鬼に攫われたように映ったのですが」と若殿は言いました。

「こんな風でしたか」と狐は言って、ゆきの姿に化けました。それから、もういちどきつね すがた もど
一度狐の姿に戻りました。

「これはなんと奇ッ怪な。いつもありがとうございます。今後はいつでも私の
しろ かんげい わかとの うま しろ かえ
城へいらしてください。歓迎いたします」と若殿は行って、馬で城へ帰りました。